

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月21日現在

機関番号：17201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652036

研究課題名（和文）〈文化免疫学〉からの挑戦—コミュニティとインミュニティ／縁と無縁の逆説関係学

研究課題名（英文）Challenge from “the Studies of Cultural Immunity” : Paradoxical relations between Community and Immunity

研究代表者

木原 誠 (KIHARA MAKOTO)

佐賀大学・文化教育学部・教授

研究者番号：00295031

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、今日の免疫学の視点を導入し、文化の主体のありかを、コミュニティ内部から排除され、周縁に置かれた「インミュニティ（免疫）＝アジール」にあると措定し、マクロ・中央集権・リアリズムの世界観を、ミクロ・周縁・虚構＝無視・排除されたものの方から逆説・異化し、文化学創成のための新しいモデルを提示したことに求められる。対象東西地域は、比較文化学の視点から重要と考えられる 1: 我国最古の駆込寺の伝統をもつ東慶寺・鎌倉 2: ヨーロッパの極西・アイルランドの周縁に位置し、ヨーロッパ煉獄伝説発祥の地、オキシデントの表象、ドニゴールに絞り、調査、分析、検証を行った。

研究成果の概要（英文）： The purpose of my study was to show a new idea on Cultural Studies from the perspective of immunology on the hypothesis of the core of culture being paradoxically in immunity excluded from community (antonym of community); it comes to be the familiar world viewed from the macrocosmic, centralized and realistic aspects reverted to the unfamiliar one from the microcosmic, marginalized and fictional. The key is to be found in the cultural functions of asylum (the same etymological meaning of immunity) . The subject area of the East (or Orient) was focused on Toukeiji in Kamakura, the earliest refuge monastery (asylum) in Japan and the West on Lough Darg’s cloister (known as the birth place of purgatorial myth) in Donegal Ireland, the representative of Occident (the most western point of Europe).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	150,000	2,050,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学

キーワード：無縁、アジール、文化免疫、オキシデント、インミュニティ、逆説、周縁性

### 1. 研究開始当初の背景

人文学における風景であった「文化」が前景化され、「文化学」という一つの組織的学問として誕生したのは一九六〇年代である。この時期は医学における免疫学の発生と期を一にしている。医学においては免疫学の台頭は一つのコペルニクスの転換をもたらした。近代医学は脳を身体を中心＝主体のありかと措定した上で、身体臓器をパーツごとに細分化し、各臓器の関係性を検証する「臓器主義」を前提としていた。だが、免疫学はこの前提を覆し、身体の主体のありかを臓器機能の役を免れ、身体の周縁を巡る<漂泊者>、免疫という現象＝作用に求め、免疫（＝時空を流動する主体）との関係性において身体全体を捉え直す新しい認識＝現象学へと医学上の転換を迫ったからである。一方、文化学は未だこの認識の転換を知らない。確かに、今日の文化学は、国民・国家という概念が「幻＝表象にすぎない」と捉えることで、実体（国民・国家）の主体が虚構（表象）にあることを暗に認めてはいる。だが、その幻を生み出す主体は何かと問われるとき、文化相対主義の名のもとに主体の問題を棚上げするか、さもなければ、「オリエンタリズム批評」に窺われるように、主体を「パノプティコン」の構築者としての社会上位（帝国主義）＝頭部・監視機構に求めるか、そのいずれかだからである。後者の場合、ギンズブルク（『チーズとうじ虫』）が指摘するように、「沈黙する絶対的な他者的存在」という言説のもとで上位による下位の排除システムを追究する余り、逆に本来沈黙などしていなかった下位・個・周縁者に対してまでも沈黙を強いる皮肉な結果を招いているのである。

### 2. 研究の目的

生物学的には身体コミュニティの主体のありかは脳にはなく、免疫（インミュニティ）にある。身体全体の記憶を宿すことで自己と非自己を識別・認識する作用は免疫にあり、免疫は頭部にはないため、識別・拒絶されるのはむしろ脳の方だからである。ではどうして免疫は身体コミュニティの主体者になりえるのか。それは免疫があらゆる身体コミュニティの臓器から無縁、つまり「(臓器機能の)役を免れ（＝排除され）」、身体の内と外との境界線＝周縁／岬を巡る<身体の漂泊者（ディアスポラ）>だからである。「役／疫の共有」という語源をもつコミュニティの主体がその内部にはなく、逆に「役／疫（共有から）の免除＝排除」を意味する（周縁・ミクロの）インミュニティに宿るというこの事実は、身体における一つの逆説であるが、本研究はこの免疫作用と文化作用との間に平行関係がみられ点に注目した。免疫と同じ意味をもつ文化学用語、「アジュール（無縁所）」

における作用＝「無縁の原理」（網野善彦）は、免疫作用と酷似する働きを示しているからである。このことは例えば我国における三大芸能、能・歌舞伎・文楽が共にアジュールを拠点とする旅芸人によって生み出された点からも首肯できる（あるいは、キリスト教の発生が周縁の地ユダヤの放浪者イエスによってもたらされた点も看過されない）。もっとも文化の主体を「不動」に置か「移動」に置かかは、定住文化と移動文化により見解を異にする。だが、L・バウマンの指摘通り現代世界が「液状化」しているとするれば、主体を移動に置く観点は有意義である。本研究は文化と免疫の平行関係に着目し、文化の主体をコミュニティの際／周縁に置かれたアジュール、漂泊するインミュニティにあると措定し、詩学（表象学）の立場から二つの実例を挙げて検討し、文化免疫学の創成を目指すことを目的とした。実例はアジュール原理が顕著に現れる二つの東西の対象地域に絞った。免疫学的には地域を限定することに意味はないが、免疫による自己認識は負の記憶（抗体形成による自己生成過程は他者との接触による負の記憶を前提にする）によることから、文化的負の記憶が宿る磁場の東西モデルとして二つの地域に注目した。

### 3. 研究の方法

本研究は科学としての免疫学と詩学あるいは表象学との隣接線に注視することで、科学と人文学の知を融合する新しい方法を考案した。その前提には以下の理解があった。すなわち、かつて「科学」は「シエンツァ」と呼ばれ、シエンツァは本来「科学」と「人文学」の「総合知」を意味しており、したがってこの方法は科学の原点に根ざす古くて新しい方法であるという理解である。方法のモデルとして念頭においた先行研究は、科学の分野においては多田富雄の免疫学研究の成果に基づく新しい医学の視座、人文学においては、網野善彦、阿部謹也等のアジュール／無縁研究、カルロ・ギンズブルクの歴史研究とその視座、および思想家 J・デリダの後期における免疫学の視座である。本研究は、上述した先行研究の精読、分析等を通じて、それらを融合させた新しい方法を考案し、その適用範囲を東西二つの対象地域に求め考察した。これらの先行研究の方法を参考にしながら、本研究は、一方において一次資料に基づく実証的な歴史記録を精読し、分析し、他方、その事実としての歴史＝記録が文学的想像力（虚構作用）の介入によって異化され、一つの表象＝文化記憶となっていく過程を分析、すなわち<記録の記憶化への過程>を分析していく視点に立った。具体的には、歴史資料と文学作品（江戸川柳等）、伝承説話（煉獄説話）を平行させて精読しつつ、虚構（表

象)作用の介入のプロセスを分析していくための方法を取った。この方法はアナル学派の方法にかなりの程度接近するものである。

#### 4. 研究成果

本研究のキータムである“immunity”とは本来、法律用語から医学用語への借用であり、これが医学用語として定着するにつれ、その代用語としてアジュールが用いられるようになった。ただしこの言葉には、民俗学というケガレの表象が貼付いている。このことは、免疫抗体が他者(異物)接触による苦痛を伴う自己克服、負の記憶による自己生成である点を考えれば必然的である。だが同時にアジュールとは網野が指摘しているように、「無縁の原理(ハレ=縁結びの原理に対するケガレ=縁切りの原理)」に支えられた自由都市=「無縁所・楽・市」を意味し、したがってアジュールは豊かな文化を育む磁場でもある。本研究はこの理解を前提に、免疫学と詩学の融合による新しい視点から理論構築を試み、その適用範囲を西洋にまで延長して行った。具体的対象は、文化免疫学の立場から重要な表象と思われる(1)鎌倉・東慶寺(2)アイルランド・ドニゴールに絞って行った。

(1)縁結び=ハレの表象である出雲大社が多く研究者に注目されるに対し、東慶寺は縁切り=ケガレの表象であるため注目されることが少ない。だが、東慶寺はD.V.に苦しむ女達を保護し、精神的治癒を行なった世界でも例のない女性による女性のための家庭裁判所の機能を有する我国最古のアジュールであったという意味でその意義は大きい。さらに、東慶寺への駆け込みが家庭からの追放=<ディアスポラ>であるとみれば、その考察はマクロの民族離散の影に潜むもう一つの離散、ミクロの家庭内離散=<内なるディアスポラ>に光を当てるという意味で意義深いものである。この問題に対し本研究は、歴史資料収集に基づく歴史考証のみに頼るのではなく、詩学と表象学の方法を加味して解明を行なった。その理由は、東慶寺境内にある松岡文庫に残る歴史資料(三行半の裁判記録)が少ないという物理的事情もあったが、それ以上に、記録(実証主義)を前提とする歴史学の盲点ともいえる記憶による表象学からの新しい歴史の方法を提示する狙いによる。人は自己の内奥の深い傷ともなる<事<の核心>を記録に残すことは稀で、その記録の大半は歴史の闇の奥、文化という記憶の中に残り、それがしだいに伝染=影響していくと考えられるからである。東慶寺の場合、まずは川柳を介して、文学すなわち虚構作用に

よる影響として人の記憶に深く刻まれていったことが確認された。調査では、東慶寺に関わる川柳の多くが、駆け込みの出発点である日本橋から東慶寺までの道中十六里を題材にしたものが多く散見されることから、道中の具体的描写を手がかりに行った。結果、東慶寺への駆け込みに関する川柳の多くは、生のままの事実を題材に創作されたものではなく、多くは「縁切尼寺・東慶寺」が表象化されることで虚構作用により滋養されたもの、創造の産物であることが検証された。

川柳によって表象化された東慶寺は負(ケガレ)の記憶として広く知られる一方で、逆に正(ハレ)の記憶=表象へと反転されたという一面をもっている。ここにアジュールのもつ「無縁の原理」が働いている点は注目すべきである。鈴木大拙、西田幾多郎、和辻哲郎、小林秀雄、岩波茂雄等、近代を代表する文化人たちがこぞって東慶寺を永眠の場を選び、そのことで東慶寺が我国を代表する文化表象となったことはその例証の一つである。東慶寺は縁切寺に相応しく、親族墓地の形態を取らず、いわば<無縁墓地>のそれであり、この無縁の形態が彼らを東慶寺に引きつけた最大の理由と判断されるからである。一九三〇年代後半から高まっていったいわゆる「近代の超克論」のなかで、彼らは「ますらおぶり」の精神を流布させる文化表象として祀り上げられ、「聖化」されたあと、敗戦後、逆に「祀り下げ」の憂き目をみた。この祀り上げ/下げの儀式の中で顧みられなかったものは、彼らの作品が共通して醸し出す、独特の感受性、すなわち「たおやめぶり」の情念の部分である。小林秀雄の晩年の作『本居宣長』はその好例であるが、ここで小林は大和魂とは本来、ますらおぶりに反立する、たおやめぶりであると主張している。和辻の晩年の作『歌舞伎と操り浄瑠璃』、大拙の「般若」考、晩年の西田哲学に深く翳る憂愁などもこの文脈で捉えられる。このように考えれば、尼寺の無縁墓地それ自体、彼らにとっての最後の隠喩、死者のメッセージであるとみることが可能である。つまり、グローバリゼーションとナショナリズムの狭間で引き裂かれ、その際に生じた政治的しがらみに苦しんだ彼らは、魂の巡礼の果てに縁切尼寺である東慶寺に駆け込んだと判断される。ここに無縁の原理の一端を垣間見ることができる。コミュニティの縁・役を免れたインコミュニティのもつ無縁の原理が、文化対しいかに重要な役割を果たしているのか、彼の墓地は沈黙のなかで雄弁に語っているからである。

(2)「オリエント」に対する西洋の表象は

「オクシデント」＝「日が沈む地」であるから、本来その言葉にはケガレの表象が含意されている。だが、西洋は二つの文化装置によってこの自己表象を隠蔽した。一方は「日が昇る地」への楽園回帰という名の帝国主義運動、拡散の方へ向け、他方は自己の名を極西（＝周縁）アイルランドという棺に納める、収斂の方へと向かった。極西の地ドニゴールが生前の罪を贖う亡霊の地、煉獄の表象となったのも必然的であるといえる（ダンテの「煉獄篇」にも影響）。近代はこの地域がジャガイモの疫病流行による多数の餓死者、移民者、犯罪による流刑者を出したことでさらに負の記憶を被せた。だが今日では「ゲール・タハト」を残す貴重な文化の宝庫として（エンヤがドニゴール出身であることも幸いし）注目を集め、「癒しの聖地」と呼ばれるに至っている。本研究では、ここにヨーロッパの文化の主体（負の記憶＝オクシデント）としてのアジュールに宿るハレとケガレの文化的逆説があるとみて、煉獄伝承を手がかりにこの逆説原理のメカニズムを、現地調査を通し解明していった。調査の中心は、ロッコ・ダーク湖畔地域に求めた。この地域はかつてヨーロッパの煉獄伝承の発祥地と目される寺院があった場所であり、そのため現在でも「ヨーロッパの巡礼地ベスト10」に挙げられるほどの人気を博している。ただし、ロッコ・ダーク湖の巡礼は煉獄巡礼である点で他の巡礼地と一線を画している。ここにアジュールとしてのアイルランド修道院のもつ「無縁の原理」が働いている点を確認、検証することができる。検証の過程で、ロッコ・ダーク湖の寺院内にある「聖パトリックの煉獄（洞窟）」が *Hamlet* の有名な台詞 “To be or not to be, that is the question” の背景にあることも確認できた。すなわちこの台詞のもうひとつの重要な意味が「煉獄が存在するのか、しないのかそれが問題である。」点である。この台詞は煉獄の存在を信じるカトリックと信じないプロテスタントの際で発せられた問いであり、これがアイルランドと北アイルランド、国土を二分する現代の問いでもあることを鑑みれば、両義的意味の間を揺れる無縁の原理が今も働いていることが、詩学に視点から検証されたことになる。

（3）今後の展望： 本研究を通して、最終的に自己と非自己を区分する文化免疫作用＝文化の深層記憶が「地霊（ゲニウス・ロキ）」に宿り、それが特殊なしるしを帯びて顕在化されることがある程度検証された。そこで今後の研究の課題は、このしるし付けのメカニズムを解明することである。幸い、本年度で完了する研究に続き、新たに「<文化地霊学

からの挑戦-免疫・タブー・徴候/周縁の<マーキング作用>の解明」という研究課題名で、科研申請（挑戦的萌芽研究）し、採択された。その概要は以下の通りである。医学・精神病理学の三つの概念、免疫・タブー・徴候に共通する現象、境界/周縁で起こるマーキング作用に着目し、これを地霊に宿る文化の深層記憶による主体的しるしづけ=各文化を区分する「タブー（原義はしるしづけ）」の痕跡と同時に徴候（歴史の予兆としての死の記憶）と措定した上で、そのメカニズムを解明することにより、死（者）の詩学の視座から政治、社会学に偏重される今日の文化学を逆説・異化する新しい学のひとつのモデルを提示すること。以上が、今後の展望である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

1 木原誠、桑田佳祐と夏目漱石の「鎌倉物語」、駆け込み巡礼歌-縁切尼寺・「東慶寺」という地場、<縁>を<無縁>で結ぶ原理、佐賀大学文化教育学部論文集第14集第2号、査読無、2010、pp.229-238.

2 木原誠、*The Unicorn from the Stars* の中の「エゼキエル諸」-詩人の沈黙と劇空間の中に発生した預言者の「責任」、佐賀大学文化教育学部論文集第14集第2号、査読無、2010、pp.221-227.

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計2件）

1 木原誠、他『臨床知と徴候知』、「徴候と予表-聖書に表れるタブーの女たちが紡ぐ運命の赤い糸」pp.252~94、作品社、2012、345

2 木原誠、吉岡剛彦、高橋良輔編、『周縁学-九州/ヨーロッパ>の近代を掘る』、昭和堂、2010、318。「まえがき」i~iv、「序論-周縁の思考」pp.1~18、「周縁の詩魂/煉獄の記憶-アイルランドの地霊が宿る場所」pp.231~261.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

木原 誠 (KIHARA MAKOTO)

佐賀大学・文化教育学部・教授

研究者番号：00295031

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし